

犯罪を減らさない方法



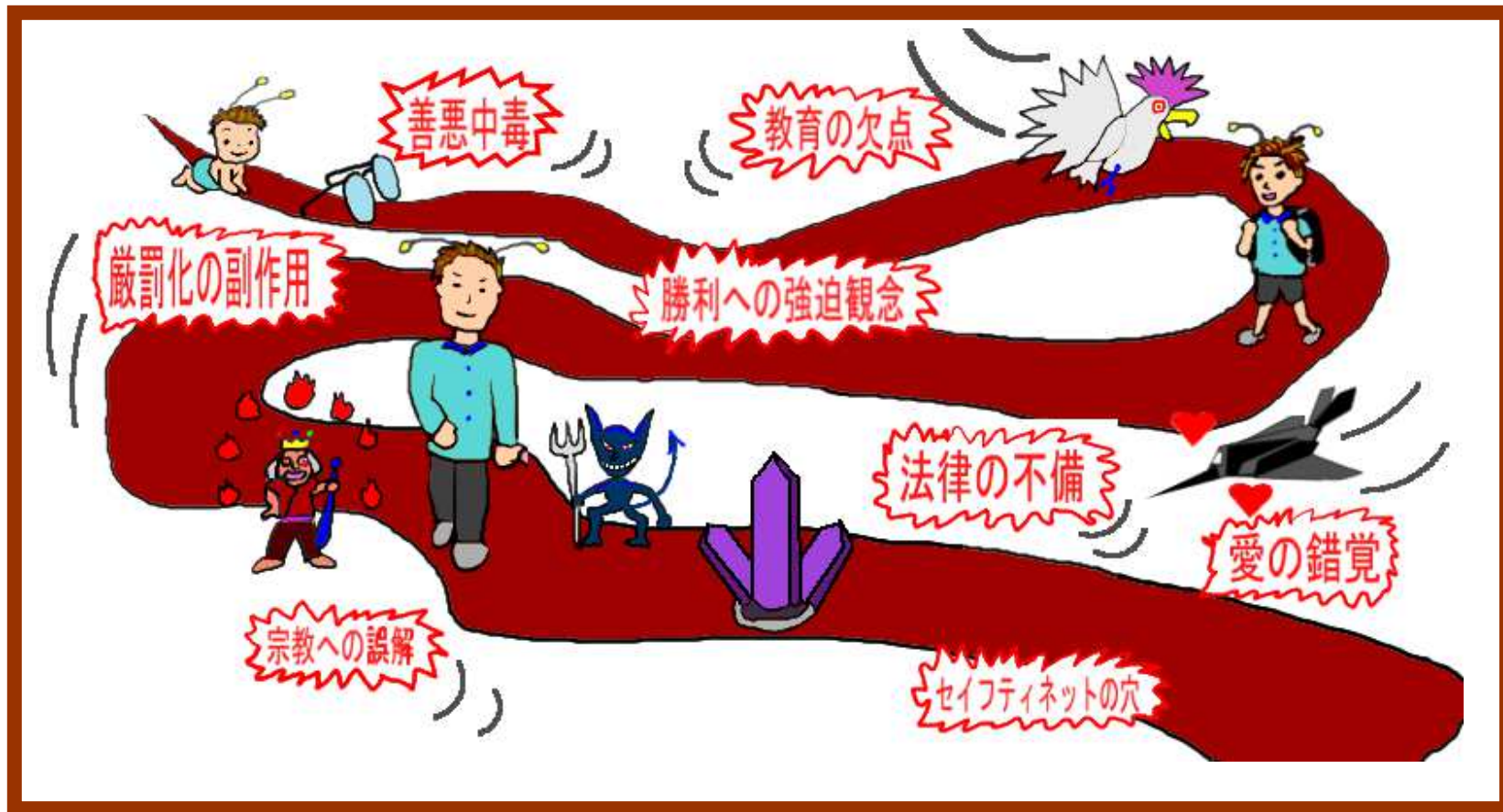
東郷 潤

広い宇宙のある星で、色々な犯罪が起きています。



人々は犯罪に苦しみ、犯罪の撲滅を願っています。

ところでその星には、生まれつきの犯罪者がいるわけではありません。普通の子供が大人になるにつれ、犯罪をするようになるのです。そこには多くの原因・理由が存在しています。



こうした犯罪の原因をひとつひとつ究明し、それらを解決して行くには地道な努力が必要です。

ああ、また犯罪が起きました。たくさんの血と涙が流されたのです。



人々の心に犯罪への怒りが湧き上がりました。



さあ、警察の必死の努力で、犯罪者を捕まえることができました！



人々は、ホッとしました。

さあ、次は裁判です。ところでこの星の裁判は、ちょっと変わっています。検察官と弁護士が勝負して、犯罪者がどれくらい悪いかを決めるのです。検察官が勝つと「すごく悪い」、弁護士が勝つと「あまり悪くない」となります。



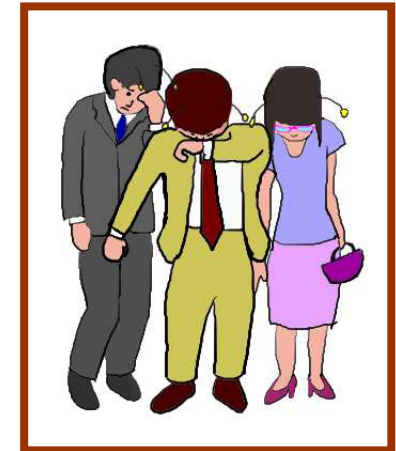
犯罪が起きたそもそもの原因を見つけそれを解決することも、犯罪被害者や遺族をいかに救済するのも、犯罪者を今後いかに治療し教育するのも、犯罪者の家族問題も、この星の裁判の目的ではありません。そんなことには、警察も弁護士も検察官も裁判官もマスコミも一般市民も、大して興味は無いのです。

この星の人々の興味は、もっぱら「どれぐらい悪いか」と、それから「勝つこと」にあるようです。

やったー！ 勝ったぞ！



ちきしょう、負けた

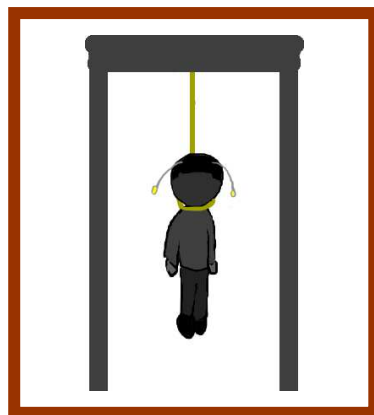


さて「どれくらい悪いか」の勝負で、犯罪者を牢屋に入れる長さが決まり、裁判は終わります。そして牢屋に入れられた犯罪者は、外部との連絡を家族など一部のを除いて原則、禁止されます。



個々の犯罪の動機・原因も、なんだか閉じ込められてしまったみたいですね。

死刑になる犯罪者も、中にはいます。「と～っても悪い」とされた人たちです。



死んだ人は二度と話ができませぬ。「何をどう変えていけば、二度とこんな犯罪が起きないように出来るのですか？」と尋ねることもできませぬ。…この星の人々は、彼らから学ぶ機会を永遠に失ってしまいました。





P. 4へお戻りください。

飽きたら、P. 12へお進みください。



**犯罪を減らしたくなければ、
犯罪が起きる原因を究明し、それらの原因を解決する代わりに、
勝利を目指し、悪を責めよう。**

あとがき ー絵本「犯罪を減らさない方法」

善悪という言葉の周りには、多くの誤解や錯覚が存在するようです。

そして、これらの錯覚は人類の長い歴史の中で、様々な悲劇をもたらして来たと考えることが出来ます。(善悪の錯覚の詳細については弊社著「善悪中毒」(リベルタ出版)をご参照ください。)

もし、あなたがこの絵本に共感されたなら、出来るだけ多くの方に、ご紹介していただければとお願いいたします。

本絵本は、自由にコピーして下さって結構です(商業出版はじめ金銭的な授受を伴う場合を除きます)。また下記WEBからは、東郷潤の他の絵本やメッセージをダウンロードすることが出来ます。

www.j15.org

©Jun Togo 2009